

日吉台地下壕保存の会会報

第73号
日吉台地下壕保存の会

年頭にあたって

日吉台地下壕保存の会会長 大西 章

日吉台地下壕保存の会の皆様、明けましておめでとうございます。本年も日吉台地下壕保存の会の活動をよろしく申し上げます。

昨年1年間を振り返り、世界的にはスマトラ沖地震・インド洋の津波、日本では台風の上陸など数多くの災害がありました。特にインド洋の津波は死者が17万人を超え、情報量が多くなるにしたがって死者の増える数が1万人単位というのは想像を絶するほどです。

私自身は何も出来ないのですがこの災害にすばやく反応をしたのは世界各地のNPO団体だったと思います。今はさすがにこれだけ災害規模が大きくなると国や国連など行政が動かなければならなくなりましたが、世界各地で自分の責任で活躍している若者を見てると頼もしく思いました。しかし、残念ながら個人が社会に奉仕するというような活動は外国に比べるとまだ日本は意識が低いような気がします。実際に会社で働いていると時間的制約が厳しいこともわかるのですが、団体や行政に仕事を任すという姿勢や社会がそのような時間を個人に与えないような環境は変えていきたいと考えています。

昨年の台風は日吉台地下壕にも影響を与え、入り口近くの崖が崩れ現在調査のため見学会が中止になっています。中止になるとわかるのですが、いかに見学会が大切であるかを実感します。特に、これから学校見学が増えるの時期なので残念です。次世代を担う子供には実際に「モノ」を見せて、自分で考えて、情報を集めて行動するようなことの大切さを学んでほしいと思います。そのような教育が出来れば日本も本当の意味で世界の中の日本になるような気がします。

これから見学会が今までのようにいかない可能性もありますが保存の会の命とも言うべき見学会は積極的に継続していきたいと思っています。



第12回横浜・川崎平和のための戦争展

「日吉キャンパスに見る戦時下の青春」

PART 3

「第12回横浜・川崎平和のための戦争展」は、慶應義塾大学日吉キャンパスの来往舎を会場に2004年10月18日から23日まで「平成16年度学術フロンティア超表現デジタル研究センター（空間と人間）」との共催でおこなわれました。

展示部門では、横浜市と川崎市に残る戦争遺跡「日吉台地下壕」「蟹ヶ谷通信隊地下壕」「陸軍登戸研究所」の実相を伝えるとともに「日吉キャンパスに見る戦時下の青春」PART 3をテーマにアジア太平洋戦争を中心に往年の青春像を慶應大学の学園生活の写真などによって展示しました。特に今年はフィリピンで特攻隊の出撃が始まって60年目に当たり、特別コーナーを設けて、塾生であった上原良司の「遺書」「所感」や遺品など実物資料の展示を通して、戦時も絶えなかった慶應義塾の自由主義的伝統の証しを紹介することができました。開催中はウィークデーにもかかわらず、延べ250名の来場者があり、興味を持って展示品に見入っていました。



展示場(来往舎)

23日には午後1時30分から高野邦夫氏（前八戸工業大学教授）により、学徒兵と軍隊一学徒出陣の背景にあるもの「陸軍予備士官学校と海軍予備学生」と題する講演がありました。



展示会場(来往舎)

戦前の国民教育と軍隊教育は一体のもので天皇制軍国主義国家の本質に迫る内容でした。引き続いて上原良司の遺族にゆかりの人々（4名）による「上原良司を語る」座談会が行われました。上原良司の生い立ち、家族、学徒出陣から軍隊生活、良司への想い、全体主義と天皇制の本質を見ぬいた三通の遺書などにふれて話されました。当日は70名に及ぶ参加者が会場を埋め、熱気あふれた質問や意見が出され、意義ある講演

と座談会でした。

今年はまだ神奈川の戦争遺跡を知るために、関連行事として戦跡見学会を計画しました。台風の影響もありましたが、慶應日吉キャンパス「ピースウオーク」は10月20日15名の参加、23日は午前40名、午後6名の見学者があり、地下壕のビデオ上映と地上施設の充実した見学会が行われました。

11月14日には貝山地下壕保存の会準備会(横須賀市)の協力を得て、大黒春江、剣持輝久先生を講師に「貝山地下壕」(横須賀市浦郷)「海軍航空技術廠」(横須賀市浦郷)「猿島要塞」の戦争遺

跡を見学しました。20名の参加者は、当日の感想に異口同音、戦争遺跡のスケールの大きさと平和の語り部としての保存活用の重要性を訴えていました。



(左より) 司会 上原登志江さん 渡部瑠璃子さん

講演会

学徒兵と軍隊—「学徒出陣」の背景にあるもの 陸軍予備士官学校と海軍予備学生

高野邦夫(前八戸工業大学教授・軍隊教育史)

〈はじめに〉

戦前の天皇制軍国主義国家(1868~1945)を支えたものは軍隊と教育である。すなわち一軍人勅諭(1889;M15)、大日本帝国憲法(1889;M22)、教育勅語(1890;M23)である。国民教育と軍隊教育は一体のもの。—1872(M5)の「学制」(初等教育の開始)、高等教育の建設と軍学校の創設・整備である。

天皇制日本を支える官僚の養成は2本立てである。つまり、帝国大学(文官)と軍学校(武官)(授業料無料)であった。1925(T14)には勅令第135号「陸軍現役将校学校配属令」(全6条)が出された。

それまで別個に発展してきた国民教育と軍隊教育が制度的にもドッキング(大正軍縮による4個師団の廃止)した。この廃止4個師団の将校の失業救済のため、宇垣(うがき)陸相と岡田文相が相談して中等学校以上の学校(私立校にも)配属した。こうして、配属令第2条による軍事教練が私立校にも実施された。

1. 予備役将校の養成

まず陸軍では「徴兵令」(1873:M6)が大改正された。内容は国民皆兵主義の実施、1年志願兵制度、現役3年を1年、費用も自弁(食料も衣服も)であった。兵役法(1927:S2)は、幹部候補制度であった。教練検定合格者には幹部候補生試験の受験資格が与えられ、合格者は将校、落第者は下士官に、費用の自弁制度は1932年まで続いた。

次に海軍は高等商船学校(航海科と機関科)入学者を東京と神戸で兵籍に編入。卒業時に海軍砲術学校(館山・横須賀)で半年の軍事教練を行ない、予備役士官となった。ちなみに下士官・兵は基本的に志願制で、特務士官であった。

2. 陸軍予備士官学校と海軍予備学生

日中戦争の全面化(1937:S12)と太平洋戦争の開始(1941:S16、12月)により、陸海軍とも絶対的に初級将校(中少尉)が不足し、大量の「戦時初級尉官」速成教育が必要となった。

まず陸軍は予備士官学校(見習下士官)1937年3月、仙台陸軍教導学校(1927:S17)の中に、はじめて開設。その後豊橋、久留米、仙台、熊本。海外にも幹部候補生隊が設置された。最初11ヶ月の教育期間であり、のちに短縮され“消耗品”としてのあつかいだった。

特別操縦見習士官(1943:S18、7月)の第1、2期生は特攻要員だった。海軍の予備学生は航空学生が最初(1933:S8)で、のちに飛行要務士も神風(しんぷう)特別攻撃隊の主力となった。兵科予備学生は1941年10月より6ヶ月の基礎教程(座学)と各術科学校で6ヶ月の教育・訓練の後、海・陸戦要員となった。

短期現役士官(短現)は、1938年(S13)から45年まで約3500名。たとえば主計科士官の任務は①金銭管理(人事・記録も)②物品管理(食料・被服からあらゆる兵備品)③文書管理(保存から暗号管理まで)、暗号については陸軍が乱数表を、海軍は海水で消えるものを使用。

戦後、短現の経験者は、大量に財界の経営者に転身。同様に陸大出身の参謀将校も経営者となった。つまり「財界」には軍人出身者が多数おり、戦前の軍隊とのつながりを無視できない。

〈おわりに〉

「学徒出陣」(人数は不明・・・9万、11万、13万、16万の四説がある。)とは、理工系、一部農林系、教育系を除いて、すべての文官候補者を“にわか武官”に仕立てあげたもの。(本土決戦、一億玉砕)

日本教育史上、未曾有の出来事だった。

また兵役法第41条には徴集延期(中学校、またはそれ以上の学校に在学するものは年齢27歳まで、願いにより徴兵検査を延期)できた。

最後に「学徒出陣」とは“学生のかり出し”であり、この言葉についても再考が必要であり、日本教育史を学ぶ場合、文官のみでなく、「武官」の教育史を忘れてはならない。

(文責：関崎益男)

座談会「上原良司をかたる」報告

運営委員 亀岡敦子

高野邦夫氏による熱のこもった講演「学徒兵と軍隊」が終わり、休憩をはさんで、座談会「上原良司をかたる」がはじまった。プログラムには「上原良司の遺族とゆかりの人々による座談会」と載せたものの、当日まで松戸市に住む妹の登志江さんのほかに誰が来てくださるか、したがってどんな内容になるのかも見当がつかなかった。幸い晴天だったので(雨なら無理ですと言われていた。)佐賀県日達原基地で筆生(事務員)として勤務し、軍隊内の良司を知る数少ないひとり、渡部瑠璃子さんが川崎から来てくださっ



(左より) 司会 上原登志江さん 渡部瑠璃子さん

た。世田谷在住のいとこ横山房子(旧姓青木)さんは少しおくれて駆けつけてくれることになっていた。おふたりには私が司会をしますから、とささやいただけで何の打ち合わせも出来ないまま、三人はマイクの前に座ることになった。今夏思いもかけぬ講演依頼があり、そのために私は良司についてのレジュメを作っていた。「1、生い立ち・家族・故郷・学校 2、学徒出陣から軍隊生活 3、最後の帰郷から出撃まで 4、上原良司がいま問いかけるもの」の4項目にわけて、彼の22年9ヶ月の人生を追ったものである。それをもとに皆さんに様々なエピソードを語っていただくつもりだった。登志江さんは、たびたびテレビの取材をうけているけれど、70人の聴衆を前に長時間話したことはないし、房子さんと瑠璃子さんにとっては、初めての経験だとわかっていただけだけれど、皆さんの人柄の素晴らしさを知っていただけに、心に響く話が聞けるという確信があった。

登志江さんの語る戦前の上原家の生活は、羨ましいほど心豊かなもので、両親の慈愛のもと、信州の美しい山河に育まれた三男二女が仲良く生き生きと暮らしていた様子がよく分かった。それだけに三人の兄全てを戦争で失った悲しみの深さはいかばかりかと、聞かざる者の胸に迫る。

瑠璃子さんは目達原での良司の姿を、まるで昨日見たばかりの人のように語ってくれた。石鹸を受け取りに来た良司とつり銭をめぐって交わした会話、テニスラケットを借りに来た様子、湯沸かし室で話したことなど。そして、あんな素敵な人はいませんでしたよ、と何度もつけ加えた。

房子さんは松本郊外の疎開先まで訪ねてきた時の良司の様子を、最後の別れとは言わなかったけれど、母にも自分にも、誰より彼を慕っていた弟にも、それがわかったと語った。麦畑まで見送り、抱き合って泣いたと言う。

そして登志江さんは、兄が「日本は負ける」と言ったことや、「天国に行くから靖国神社には行かないよ」と話したこと、橋のたもとで大きな声で三度「さようなら」と告げたことなど、涙をぬぐいながら話してくれた。映像や活字で知っていた事を、本人の口から直に聞くと胸をしめつけられるような悲しみが迫ってくる。

その後、様々な好意に満ちた質問があり、笑いと涙の座談会はあたたかい拍手のうちに終わった。三人とも控えめな言葉であったけれど、戦争の悲惨をうったえた。控えめであるだけに、よけいに心打つものがあった。登志江さんの締めくくりの言葉「兄たちを亡くしたことは60年経って昨日のここのように悲しい。戦争なんて何もよいことはないのです」を、私たちは心に刻まなければならないと思った。

会員寄稿

「高麗神社・聖天院と巾着田」

高校・塾講師 関崎益男

九月中旬、地域の学習会仲間に誘われて埼玉県日高市の高麗(こま)神社・聖天院と巾着田を訪れた。当日はとにかく暑かった。巾着田(きんちゃくだ)は市内を流れる高麗川(こまがわ)の蛇行によってつくられ、その形が巾着袋に似ていることから呼ばれたという。直径約500メートル、面積約17ヘクタールの中州に咲く、秋の曼珠沙華(まんじゅしゃげ:彼岸花)の群生地は辺り



一面を真紅に染めていた。

コースは立川駅改札口に集合、青梅線で拝島へ、そして八高線で高麗川駅下車。そこから歩いて出世橋、高麗神社、聖天院をめざした。30分ほどで高麗神社に到着した。この神社は716年(霊亀2年)高麗郡が置かれた際、初代首長高麗王・若光(じゃっこう)の徳を偲び、建立されたと聞く。境内には国指定の重要文化財・高麗家住宅も建つ。ここで昼食。雅楽奉納演奏会を見学。聖天院は若光の菩提寺で雷門・王廟・中門・阿弥陀堂・本堂・鐘楼・慰霊塔なども参拝。帰りは巾着田・あいあい橋から民俗資料館へ。高麗駅から西武池袋線で池袋、渋谷と回り、帰途についた。お彼岸も近い真夏日のこの日、妻の病氣療養中に訪れたマンジュシャゲの花咲く高麗の里の散策は真紅の花の色とともに心に残る一日となった。

戦中・戦後の私の学生生活 (3)

柳屋 良博

○昭和20年度・・・大学予科2年

昭和20年4月5日学校に集合して新たな動員先の説明があった。すなわち南武線鹿島田駅の芝浦電気特殊鋼の組み立て工具研磨係で、ここでは旋盤操作を教えられた。二等辺三角形の形をした特殊鋼を先端に固定した金属棒を旋盤に取り付け、金属を削るのである。左右の手を同時に逆方向に回すことがまだ会得できないでいた16日、この工場も空襲でやられてしまった。崩壊した建物の下からバイト(金属を削る刃物)を取り出して灰を落とし積み上げるのである。この作業は私の西山寮罹災まで続いた。東横線の工業都市駅か武蔵小杉駅から、南武線の枕木を踏んだり、路肩を歩いて出勤したこともあり、川崎駅回りでも通勤した。工場から提供される半ば焼け焦げのお米で握られたお結びやおはぎをほおぼりながら、友人と駄弁るのが目的で、何時入隊通知が来るか分からない我々は、出勤正常ならざる早退常習犯であった。たしか日給二円が報酬だった。

西山寮には十人近くの学生が下宿しており、一高在学中のガンさんと呼ばれる大変風格のある名物男もいた。ポンプで洗面していると軒下で山鳩の鳴く、商売を抜きにした古びた二階建ての学生下宿だったが、5月25日夜10時過ぎ頃から26日払暁にかけての空襲で焼け落ちてしまった。最初は戦災などかわりのない一夜と思っていたが、近くの輜重兵連隊とかに焼夷弾が落ちたと伝え聞き、やがて帝都線の枕木がところどころ燃え始め、火も寮に近づいてきた。付近一帯が明るくなり、強風に逆巻く火の手が音を立てて吹き荒れ、屋上でバケツを使って防火しても焼け石に水で西山寮が危なくなり、ガンさんの指示で一高の武道場(無声堂)に避難して全員無事だった。夜具は自室にのべたままであり、崖下の防空壕内に入れておいた、衣類を詰めたトランクも燃え尽きているのを翌朝確かめた。一高前駅からの細道には焼け残った樹木や家屋の一角も目に入り、土地の起伏に左右されたのか激しい火勢と熱風が気ままに走った跡であった。

生活の場を失っては親元に帰るほかなかったが、寮の経営者は収入源を失い、しかも住む場所もなく大変なことだった。火が回ってきた時の下宿のおばさんの耳をつんざく悲鳴が忘れられない。渋谷駅で見た掲示で山手線は不通、回復した東海道線は品川駅から発着していることを知り、保証金を払っては買い求めた貸本を取めたリュックだけを背に、品川駅まで歩く覚悟で出発したが、幸いトラックに拾われた。京浜デパート沿いの街路上に行列を作って一晩を過ごし、罹災証明書を示して乗車券を買い、5月28日12時発かの列車に乗り、急行で24時間を要するところを30時間近くかかって山口に辿り着いた。戦闘帽に受け取った乾パンと出征した友人の残して行ってくれた真っ白い切り餅を生のままかじって飢えをしのいだ。空襲を体験したことのない母からは、寝具や衣類の所在を尋ねられ

惜しがられた。

6月9日か10日母の知り合いの軍人さんが自宅に見え、私の入隊を知らせてくれた。下宿の罹災と工場の欠勤、そして入隊を担当の一ノ瀬先生宛毛筆で認めて休学届を郵送したが、空襲下の郵便事情を考えると、先生が受け取られたかどうかは疑わしく、戦後も先生に確かめていない。

6月18日山口市の西部四部隊に入隊した。営門の前に集った人たちは、寄せ書きをした日章旗を斜めに肩に掛け、家族との別れを惜しんでいた。私は奉公袋だけを持って見送りの家族と待機していたところ、中学時代の同窓生数名から、「好い気味だ、軍隊で鍛え直されて来い」と罵られたことが忘れられない。行軍で秋吉洞近くの大田を経て、28日日本海側の三隅国民学校(大津郡三隅町)に到着、大国28346部隊田辺隊に所属した。教室が兵舎となり、学校付近での訓練が始まった。

入隊早々は毒ガス小銃担当と告げられたが、軽機関銃分隊として訓練された。石ころの多い川原で両肘・両膝を使って匍匐前進を繰り返し、木切れで鉄兜を叩かれながら鍛えられた。各自が見よう見まねで編んだ即席のわらじを装着しても、大変厳しく体にこたえた。仙崎港まで行軍し、「貴様らの生死与奪の権は自分にある」と絶叫する中隊長の抜き身の拳銃に脅かされながら、満州から到着したという60キロかの大豆袋を運ぶ体験もさせられた。万事が要領の軍隊では、荷揚げ中に竹筒を袋に差し込んでちょろまかした大豆を豆腐に変える古兵の腕がねたましかった。

本来は入隊三か月後に受けるはずの第一期検閲が近づいてくると、速成兵士の訓練は専ら戦車に対するものになった。ビルマ戦線で考え出されたとかいう戦法は、大地に穴を掘って身を隠し、戦車に見立てた大八車が近づいてくると、かなりの重量の一辺30センチ位の立方体の木箱に砂を詰めて爆雷に見立てたものを、車の両輪の間に投げ出して戦車を爆破し、わが身を地上に伏せば助かることもあるという肉弾攻撃だった。爆雷は箱爆雷あるいは破甲爆雷もしくは破鋼爆雷かもしれないが、口伝教育なのでつまびらかではない。体中の水分がすっかり汗となって流れ尽くすような真夏の灼熱の炎天下、娑婆では振り向いたこともない真桑瓜でも、小隊長の私費で配られた時の生き返ったようなひとときは忘れられない。軍隊訓練で受けた身体上の苦しさを思えば、相当な苦難であっても克服できないはずはないと、戦後の生活で幾度そう思ったことか。

敗戦は8月17日だったかの軍旗焼却で知らされた。少量の生地の灰を付与され、今時の四十七士気取りで、連合軍に対する復讐を誓わされた。列車の屋根の上に乗せて、復員は遠距離の高齢者から始まり、一番若い自分たちは憲兵要員として、8月30日三隅から山口の原隊に帰った。遅れてやって来た神風が、敗戦後の木造兵舎に吹きつけ、かなり大きな中隊の建物を土台から揺さぶり、台風襲来の怖さを体験した。次いで豪州軍が進駐してくるので、10月16日秋吉台の演習時に使用する兵舎に移動した。用務といえ、時に将校宅に粉末味噌・粉末醤油・携帯口糧や机・椅子などの備品を運ぶ私用のようなもので、これは使役と呼ばれた。粉末の調味料のあることを軍隊で初めて知った。時に煙草・菓子が一兵卒にまで配布されたが、自分の軍隊経験では酒保など見たこともなかった。当時、喫煙習慣はなく、菓子と交換して随分ありがたがられたものだ。あとは毛布にくるまり横になっているだけの毎日となり、退屈さを紛らわせるための悪戯心から『ほまれ』や『光』を吸ってみて、目が回るどころか美味しくて病みつきとなった。復員時には星二つのポツダム一等兵に進級し、月の手当て10円だかの一年半分かを給付されて自宅に帰り、しばらくの間、蚤と虱退治に熱中しなければならなかった。

活動の記録 (2004年9月～12月)

- 9/24 平和のための戦争展実行委員会 (日吉地区センター)
- 9/25 定例見学会 27名
- 10/8 地下壕見学会 7名 (藤沢三田会33経D組クラス会)
- 10/13 艦政本部地下壕の調査・埋め戻し再開。航空本部地下壕部分の開発許可に伴う調査の計画について横浜市危機管理室と話し合い
- 10/15～10/23
第12回横浜・川崎平和のための戦争展
日吉学術フロンティア「空間と人間」
日吉キャンパスに見る戦時下の青春PART3
(慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎)
準備・展示・講演会
- 10/20 地下壕見学会 8名
- 10/23 地下壕見学会 28名
- ☆戦争展開催中に、台風のため地下壕地上部に崖崩れが起こり、大学の判断で2004年中の見学会が中止となりました。従って10/20、10/23の両日は地上部分の案内のみ行い、地域の小学校の見学等、年内の見学はすべて中止としました。
- 10/27 艦政本部地下壕、航空本部地下壕の「記録・保存」調査について横浜市文化財課との話し合い
- 11/1 「日吉台地下壕展」開催について「すとう信彦と市民政治バンド事務所」との話し合い
- 11/14 貝山地下壕と猿島見学 (横須賀市) 22名 (平和のための戦争展関連行事)
- 11/16 第5回運営委員会 (慶應高校物理教室)
- 12/6～12/10 「日吉台地下壕展」(すとう信彦と市民政治バンド事務所)
日吉台地下壕の写真・資料を展示
- 12/8 「日吉台地下壕を語る会」を同事務所で開催
- 12/16 第6回運営委員会・忘年会
予定
- 1/18 第7回運営委員会 会報73号発送 (慶應高校物理教室)

★ 定例見学会は毎月第4土曜日に行っていましたが、昨年10月より地下壕内の見学は中止となっています(2005年1月10日現在)。再開等については下記にお問い合わせ下さい。(TEL 045-562-0443 喜田)

▲ 定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL & FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先 (会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 港北区下田町2-1-33 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会